戦後日本のマリンバの楽器改良
――高橋美智子とこおろぎ社による音域拡大の試み――

Improving of the Marimba Instruments in Postwar Japan:
—Attempts to expand the tonal range by Michiko Takahashi and Korogi Co. Ltd.—

横 地 ち ひ ろ
Yokochi Chihiro

マリンバは、20 世紀後半に、おもに日本とアメリカで、クラシック音楽に用いられるようになり、コンサート・マリンバとしての地位を確立することになる。その背景には優れた演奏家の活躍と、それを支えた楽器の改良があった。

安倍圭子氏（1937 生、以下敬称略）とヤマハの協力によるマリンバの改良はよく知られているが（Ochi 2016, カイト 2011）、本稿では、20 世紀後半から 21 世紀にかけて活躍したマリンバ奏者高橋美智子氏（1939 生、以下敬称略）と、日本における最大のマリンバ製造会社[1]であるこおろぎ社を取り上げ、マリンバの改良の実態とそれが日本のマリンバ界に与えた影響を明らかにしていきたい。高橋は、次々とマリンバの開発を試み、最終的には約 7 オクターヴ（以下オクターヴは oct.と略す）まで音域を拡大した。こおろぎ社も楽器改良に取り組むが、特別注文で音域 C16-F81 をもつ 5 oct.と 6/12[2]の〈大型マリンバ〉を完成させるなど、高橋との関係も深い。

こおろぎ社については、筆者による関係者へのインタビュー、ウェブサイト、過去の商品カタログなどに基づきその取り組みについて調査する。一方、高橋については、高橋の「プロフィール」（高橋 2017）、筆者による高橋へのインタビュー、高橋による手稿資料「武蔵野音楽大学楽器ミュージアムへのマリンバ寄贈添付資料」（高橋 2015）に基づいて楽器改良への関与について明らかにしたい。また、文末の「表 5　高橋美智子初演作品一覧とマリンバ開発状況」に、音域拡大の実現が実際の作品にどのように反映されていったかを示す。

なお、本論文では、マリンバの音域を示すために、こおろぎ社で用いている鍵盤[3]番号を利用する。図 1 にピアノの鍵盤との対応を示しておく。ピアノの最低音を 1 として半音刻

---

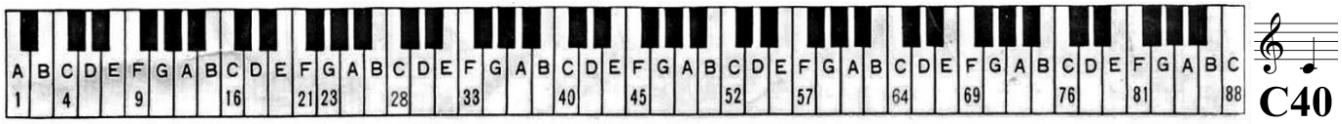
[1] Ochi 2016 では「the biggest marimba manufacturer in Japan」と記されている（Ochi 2016, 121）

[2] oct.を超える音域の記載については、6/12（oct.を超える鍵盤数／オクターヴの全鍵盤数）のように分数の形で示す。なお、こおろぎ社のカタログでは、顧客に分かりやすいように 1/2 とか 2/3 のように約分しているが（宮崎雪忠（東京営業所/営業）インタビュー 20230607）、本論文では、音域が明確にわかるものについては、一目見て分かるように、約分せずに 6/12、4/12 と記載する。

[3] マリンバでは、〈音板〉と〈鍵盤〉の両方の語が使われるが、本論文では「鍵盤」で統一する。

みに 88 まで番号を振り、それと音名を組み合わせて実音を示す。

図 1 マリンバの鍵盤番号とピアノの鍵盤との対応
こおろぎ社のカタログをもとに横地作成（こおろぎ社 1969-71）。



1. 日本におけるマリンバ前史とマリンバ製作の開始

1-1　マリンバ前史—日本での木琴の普及とマリンバ普及

日本では、マリンバに先立って、木琴が広く普及した。1910 年に日英博覧会に派遣された陸軍戸山学校軍楽隊が持ち帰った〈ストローフィドル〉[4]が日本の木琴のはじめといわれ、1915 年には、日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社）が日本国内で初めて卓上木琴を製造している（石原 2018, 21）。その後、平岡養一（1907-1981）や朝吹英一（1909-1993）といった木琴奏者が、ラジオ放送や演奏会で活躍した。二人とも、最初に手にした楽器は日本楽器製の音域 2 oct.半ほどの木琴であったが、平岡は 1928 年のデビュー・リサイタルでアメリカのディーガン Diegan 社製の 3 oct.のスーパー・ライト・ウェイト（Super lite-wate Xylophone）No.834 を用い（通崎 2013,29）、朝吹は 1927 年に JOAK（現 NHK）に初出演した際に、同じくディーガン社製の 4 oct.のアーティスト・スペシャル・シロフォン（Artist Special Xylophone）No.264 を用いた（通崎 2013, 307）。

1947 年の「学習指導要領（試案）」は、小学校 3 年生の楽器の選択肢の中に木琴を挙げ（文部省 1947, 18）、その結果、木琴の製造会社が急増した。1948 年の文部省の資料には、東京シロホン製作所、東海楽器製作所、水野楽器製作所、日本教育楽器製作所、コッス産業株式会社、SM シロホン研究所、河合楽器製作所、川田楽器研究所、宇陽教材製作社、日本文化教具株式会社、吉田楽器店、トキワ木琴製作所、山口木工製作所の 13 社が記載されている（教育音楽協会 1949, 32-33）。このほかにも、1945 年 10 月から日本楽器製造株式会社（1987 よりヤマハ株式会社、以下「ヤマハ」と略）が戦争で途絶えていた木琴の製造を再開（井上 2018, 142）、1947 年には斎藤楽器製作所（石原 2018, 21）、木材会社最大手の日本木材工業なども卓上木琴製造に乗り出す（Ochi 2016, 41）。そして 1949 年、福井県鯖江市では、のちに、こおろぎ社を設立する斉藤藤五郎氏が親族とともに教育用卓上木琴の製作を開始し、1953 年には立奏木琴の製造も開始した。これがのちに鍵盤打楽器の主要メ

[4] 紐で結んだ音板を枠に吊り下げたタイプの木琴。

ーカーに成長するこおろぎ社の前身となる[5]。

1-2　マリンバ製作の開始

マリンバが初めて日本にもたらされたのは、学校教育により一気に木琴が普及した時期であった。1950 年にアメリカの福音派プロテスタントの布教活動の一環として〈ラクーア音楽伝導団 Lacour Musical Evangelistic Crusade〉が日本を訪れ、130 の都市でマリンバの演奏とともに布教活動を行った（石原 2018, 22）。このことがきっかけになって、日本でマリンバは広く知られた。

しかし、日本でのマリンバ第 1 号は、〈ラクーア音楽伝導団〉の来日前年の 1949 年に日本木材工業の社長宮川武が作らせた 3 oct.マリンバ（F33-F69）である（Ochi 2016, 41）。宮川は、1950 年にはマリンバの製作を開始し（カイト 2011, 33）、翌 1951 年には〈ミヤカワマリンバ研究所〉も開設した（通崎 2013, 239）。こおろぎ社は、後述のように、1960 年頃にマリンバの製造を開始し、4 oct.と 6/12 を持つマリンバの製作に成功する。ヤマハも 1967 年に 4 oct.マリンバを製作する（石原 2018, 22）。他にも前述の水野楽器製作所、斎藤楽器製作所などでマリンバの製造が行われ、マリンバが急速に普及発展することになる。当初は、アメリカのマッサー Musser 社製やディーガン Deagan 社製のマリンバを使っていた演奏家たちも次第に国産のマリンバを使うようになっていく。

クラシック音楽の世界でマリンバの地位を確立するためには、音域の拡大が何よりも重要であった。それにより演奏できるレパートリーが大きく変わってくるからである。以下でこおろぎ社の音域拡大の取り組みについてみていく。

2. こおろぎ社のマリンバ

2-1　日本のマリンバ製作の変遷に関する先行研究

現在、日本のマリンバ製作の変遷についての先行研究では、ヤマハについての記述が多い。先行研究に基づいて、その変遷を見ると、ヤマハでは、1967 年に 4 oct.マリンバ〈YM-400〉を完成させ（石原 2018, 22）、1971 年からは、安倍圭子との協力が始まり、コンサート用マリンバ〈YM-4500〉を製作、1973 年にはさらに改良を加えた 4 oct.半を持つ〈YM-5000〉が完成した（カイト 2011, 67）。その後も安倍圭子の求めに応じて〈YM-5000〉の低音部を拡張するために、低音部に装着できるプロトタイプを開発し、5 oct.マリンバを可能にした（カイト 2011, 84）。それを安倍圭子は 1981 年のアメリカツアーで使用した。1984 年には、〈YM-5000〉よりもさらに音域を広げ、音板を広くして、あたたかく深い音色を追求した、一体型の 5 oct.マリンバ〈YM-6000〉が完成した（石原 2018, 22）。

---

[5] こおろぎ社［2023］「KOROGI の歴史」https://www.korogi.co.jp/quality/history.php（20230920 閲覧）

2-2　こおろぎ社創業（1949 年～1971 年）から初期のマリンバ製造まで

こおろぎ社は、1949 年に教育用卓上木琴の製造を開始した齋藤藤五郎らが、1953 年に株式会社こおろぎ社を設立し、同年立奏木琴の製造を開始し、以後、立奏鉄琴、ケース入り卓上木琴コンパクト、箱型共鳴管付木琴の製造を手掛けるようになる[6]。

1960 年～65 年のカタログには、4 oct.の〈600〉、〈600 デラックス〉、〈650〉、〈650 デラックス〉、〈1200〉、音域 C28-F81 の 4 oct.と 6/12 を持つ〈750〉など、音域やパイプの形状が異なる 6 種類のマリンバが載る（こおろぎ社 1960-65）。教育用のみでなく、「デラックス」タイプなど、すでに演奏家を視野に入れた製作が行われており、ヤマハよりも前に 4 oct.半の音域を実現している。

1969 年までには、音域 G23-C76 の 4 oct.と 6/12 の〈1500 コンサートグランド〉が製作されており（こおろぎ社 1960-69）、これが、1971 年のカタログでは、音域 G23-F81 の 4 oct.と 11/12 のコンサートグランド〈1500〉となっていった（こおろぎ社 1969-71）。低音は G23、高音は F81 へと着実に音域を広げていく様子がカタログから見て取れる。以下、こおろぎ社の沿革とマリンバの音域拡大の取り組みの歴史について、2022 年 3 月 10 日に行った現代表取締役の齋藤宰氏[7]（1950 年生、以下敬称略）へのインタビューを中心に、ウェブサイト、カタログも参考にしながら、記述していく。

2-3　東京での営業開始とコマキ楽器とのかかわり

齋藤によると、こおろぎ社が本格的にプロの演奏家向けの楽器に取り組むようになったのは、齋藤が入社した 1972 年以降のことであるという。当時、販売先は関西が中心だったので、関東への進出を試みたが、その折に、自社製品の欠点を改善していかないと積極的な営業を展開できないという状況であったという。そこで、齋藤は、ピアノの全国的販売で活躍していたトップクラスの営業マン佐々木弘光氏に、東京の営業の中心となってもらえないかと声をかけた。当時、佐々木は、他社の楽器店店長を務めていたが、何か新しい楽器を世に紹介したいと考えており、関東での拡販を目標に営業を始めていたこおろぎ社の事が気に入り、1973 年、佐々木を代表とする、関東の総代理店「東京こおろぎ社」（現在、「ネオリアこおろぎ」）が設立された。

写真 1
こおろぎ社製マッサー型マリンバ（山田 1978-2, 7 より転載）

こおろぎ社は、1975 年から本格的にプロ演奏家向けのマリンバの開発を始める[8]。佐々木は、日本木琴協会とのつながりが深く、各地の協会支部長から、マリンバ界の情報を得

[6] 前掲ウェブサイト。
[7] 福井県鯖江市五郎丸町出身。
[8] 前掲ウェブサイト。

る事ができた。当時、マッサー社、水野、ヤマハのマリンバがプロの演奏家によく使われており、そうした楽器の情報や、演奏家の要望などを参考に、まずは他社製品を目標に品質向上に取り組み、さらに音板材にこだわるなどして品質を上げていった。演奏家からの要望としては、他社と同等の品質で安価なものをというものが多かった。1977 年に発売された〈マッサー型マリンバ〉（写真 1）もその一つで（山田 1977, 9）、コマキ楽器店[9]から、マッサー社製のマリンバ（音域は A25-C76、表 2 参照）と同様の音域のマリンバを、K.M.K[10]のブランドで、もう少し安価に作れないかという要望があり、開発したものである[11]。

2-4　こおろぎ社の海外進出

1974 年に、オーストラリア・ニュージーランドへ輸出を開始したのが、こおろぎ社の海外進出の初めである[12]。その後、1974 年に完成したこおろぎ社のオルフタイプ[13]の木琴が、アメリカでかなり売れ、また、1979 年、教育用のシロフォンとマリンバが、楽器フェアでバイヤーの目にとまり、KORI ブランドで販売開始すると、反響が大きく、多くの注文が入った。こおろぎ社の評判はヨーロッパにも波及し、1982 年にオランダの Pustjens Percussion Products と販売総代理店契約を締結し、Concorde の名前で販売した[14]。

海外での評判が逆に日本に伝わり、国内需要も高まった。次第にこおろぎ社の工場生産が追い付かなくなり、円高により輸出がしにくくなったことを機に、1985 年以降、国内生産販売に重点を移す。上記の中、オランダの一社だけが、こおろぎ社の国外販売の窓口として残った[15]。その後、アジアでの販路を少しずつ拡大し 1989 年から韓国で、1991 年からは台湾の楽器店と取引を開始した[16]。21 世紀に入り、2006 年にオーストラリアや北アメリカの楽器店と販売契約締結[17]、再び、世界各地でこおろぎ社の楽器が販売されるようになった。輸出に際して、音盤の素材となる木材の部位により、最高級、高級などの表示もつけるようにした。

2-5　こおろぎ社の音域拡大、バスマリンバ開発

1970 年頃から日本のトップレベルのマリンバ奏者達が、低音部の音域の拡大を望むよう

---

[9] コマキ楽器は、1931 年に創業し、戦後 1945 年に浅草で営業を再開した。1974 年に日本初の『第一回パーカッション・フェア』を開催し、その時に、マリンバを始め、打楽器の発売の反響が大きかったので、当時の代表取締役の小牧正明は、経営方針を打楽器中心に切り替え（小牧 2006, 3）、1977 年日本初の打楽器専門店〈ジャパン・パーカッション・センター（略称 JPC）〉を開いた（小牧 2010, 4）。
[10] 当時、株式会社コマキ楽器のオリジナル・ブランド
[11] 筆者による齋藤氏へのインタビュー（2022 年 3 月 10 日）
[12] 前掲ウェブサイト。
[13] 教育用のマリンバで、共鳴管の代わりに大きな共鳴箱が取り付けられており、また使わない鍵盤は取り外して必要な音だけを並べて演奏できる。
[14] 前掲インタビュー。
[15] 前掲インタビュー。
[16] 前掲ウェブサイト。
[17] 前掲ウェブサイト。

になる。こおろぎ社にも、演奏者から一体型の 5 oct.マリンバ[18]やバスマリンバの製作の要望が来るようになり、1980 年にその製作に着手する[19]。従来のパイプでは、低音部で美しくよく響く音が得られないため、齋藤は、音板に近い上方の開口部を小さく、下方は大きく裾が広くなった形状の共鳴管を開発し、音響物理学者ヘルムホルツ（1821-1894）[20]にちなんで「ヘルムホルツ型共鳴管」と名付け、その共鳴管を用いて音域 F21-C76 の 4 oct.と 8/12 のマリンバ〈1500 コンサートグランド〉を完成させた[21]。その後も、「ヘルムホルツ型共鳴管」に細かい修正を加え、様々な形の共鳴管を作った[22]。1982 年には、世界に先駆けて量産型のヘルムホルツ型共鳴管の開発に成功し、現在ではこれが主流になっている。これを用いて完成したのが C16-C52 の 3 oct.の〈バスマリンバ 2000〉である[23]。1988 年には、それを搭載した C16-C76 の 5 oct.マリンバなど、〈バスマリンバ 3000〉シリーズが発売された（こおろぎ社 1994-99）。

高橋は、1979 年松平頼暁作曲《「オシレーション」マリンバと３群のオーケストラのための》の初演後に、音域が C16-F81[24]の、5 oct.と 6/12 の〈大型マリンバ〉をこおろぎ社に特別注文した（次節参照、表 5 の 18）。〈大型マリンバ〉は、1985 年の演奏会で初演された金田潮児作曲の《SELECTION II》で Cis17-F81 の音域が使われており、低音部だけでなく、高音でも従来の音域を超える F81 が用いられているので、この時には完成していたことが確かである（表 5 の 27）。まさに、齋藤が共鳴管の開発に取り組んでいた時期の仕事ということになる。底の開口部の形から、高橋の〈大型マリンバ〉は、おそらく〈バスマリンバ 2000〉完成の 1982 年よりは後で、〈バスマリンバ 3000〉（1988 発売）に近い時期であろうと齋藤はいう[25]。共鳴管の形は、ヘルムホルツ型が開発された後も、常に一番良い木琴の音を追求して、試行錯誤が続いていたことが分かる。

高橋の〈大型マリンバ〉の特注の話が来た時のことを、齋藤は以下のように話す。

> 高橋美智子さんと言えば、日本の安倍圭子さんと双璧をなす方であり、下手に評価を下げるような事は出来ないし、自信もなかった為、一度はお断りをしたが、「せっかくこのような話がくるんだし、そういう話にのれないのも情けない、やっぱりやろう」という佐々木のことばで、この特注を引き受けることにした[26]。

---

[18] マリンバ奏者の間では、音域を付して、「○oct.マリンバ」という言い方が定着しているので、それに従う。
[19] 前掲インタビュー。
[20] 共鳴体にあける穴の大きさと箱の音量の相関関係を、実験に基づいて解明して理論づけた。
[21] 前掲インタビュー。
[22] 前掲インタビュー。
[23] 前掲ウェブサイト。
[24] Ochi も、1987~2008 の間に C2－F7(C16-F81)の 5.5 マリンバを日本で初めて作ったのはこおろぎ社で、最低音はヤマハと同じだが、高音がこおろぎの方が高いと記す（Ochi 2016, 121）。
[25] 前掲インタビュー。
[26] 前掲インタビュー。

この頃、こおろぎ社の製造技術は、トップレベルの演奏家からの特注を受けるまでに、向上していたといえる。

３．高橋美智子によるマリンバの音域の拡大と楽器の開発への要望

3-1　日本の音楽大学でマリンバでの受験が可能に

マリンバ奏者の活躍、マリンバの音域拡大の発展にともなって、音楽大学でも、打楽器の中の 1 つであったマリンバを重視するようになる。武蔵野音楽大学では、1966 年度の入学要項に、はじめてマリンバが記載され（武蔵野音楽学園 1966, 3）、管・打楽器専攻のなかで太鼓とマリンバを分けて考える様子がみられる。1970 年度から講師に高橋を迎え、1973 年度からはマリンバでも受験ができるようになる（武蔵野音楽学園 1973, 10）。

当時のことが、コマキ楽器の広報誌『J.P.C』に紹介されている。

> 打楽器科には通常の打楽器専攻クラスと、これは世界でも例のない、もちろん国内でも唯一のマリンバ専攻クラスとがあり、両者は全く独立しています。マリンバを打楽器群のうちの１つとは考えず、ピアノのように独立した一個の楽器と考え、学問的に深く探究しようとする武蔵野音楽大学の姿勢には、ユニークなものがあり、その将来性は各方面より多くの注目を集めています。（山田 1978-6, 1）

この記事から、武蔵野音楽大学は、もっともはやくマリンバ専攻クラスを設置し、注目されたことが分かる。

武蔵野音楽大学で打楽器を指導していた小林美隆は、これを契機に、兼任する桐朋学園大学にも声を掛け、桐朋学園大学にもマリンバ科が設置された。そして、安倍圭子が指導教員[27]として招かれたという[28]。また、唯一の国立の音楽大学である東京藝術大学が、マリンバで受験できるようになったのは、1981 年度からである。前年の 1980 年度の募集要項に、翌年からマリンバによる受験も認めると予告記事がある（東京藝術大学 1979 12, 16）。

1950 年に〈ラクーア音楽伝導団〉が来日してから、約 30 年間のうちに、日本でのマリンバは、マリンバの作品の増加、楽器の音域拡大、そして音楽大学でマリンバでの受験が可能になるなど、各方面で目覚ましい発展を遂げたことが分かる。次項では、その目覚ましい発展に尽力した高橋の取り組みについて述べる。

---

[27] カイトによれば、安倍圭子は 1970 年桐朋学園大学音楽部講師に就任（カイト 2011, 201）。
[28] 筆者による高橋氏へのインタビュー（2023 年 3 月 26 日）。

3-2　高橋美智子とマリンバの音域の拡大

高橋が幼少期に自宅で使用していた木琴は、コッス産業株式会社[29]という音叉の会社から発売されていた木琴であった。次に、高橋が使用したのは、マッサー社製マリンバ 250 号である。これが高橋にとって最初のマリンバとなった。マリンバ 250 号は 4 oct.と 1/3（A25-C76）を持ち、1960 年から 1990 年の初め頃まで非常に人気があり、マリンバ界の主流になっていた（高橋 2015）。しかし、クラシック音楽の世界でさまざまな楽器と伍して演奏をしていくためには、広い音域が必要である。88 鍵で 7 oct.以上の音域をもつピアノと比べてみても、4 oct.ではとても音域が足りない。音域の拡大はマリンバ奏者たちにとって大きな課題であった。

次項以下では、高橋のマリンバの音域拡大の試みとマリンバ作品の関りを見ていく。音域が拡大されると、その音域にあわせた新作が作られるという状況を見るために、文末に「表 5　高橋美智子初演作品一覧とマリンバ開発状況」を挙げる。

3-3　〈バスマリンバ〉

高橋は、1975 年頃、C16-Gis24 の低音部の楽器〈バスマリンバ〉（写真 2）を創案し、水野マリンバの水野三郎に製作を依頼、1979 年に完成し（高橋 2015）、松平頼暁作曲《「オシレーション」マリンバと 3 群のオーケストラのための》の世界初演時に、上記マッサー社 250 号と〈バスマリンバ〉を連結し、C16-C76 の 5 oct.マリンバ（写真 3）として使用した[30]。〈バスマリンバ〉の共鳴管の底には、薄い膜が張ってあり、ナビンバ[31]としても使用可能である[32]。

写真 2 水野マリンバ社製の〈バスマリンバ〉	写真 3　マッサー社 250 号と〈バスマリンバ〉の連結

なお、前述のように（2－1）、ほぼ同じ時期に、マリンバ奏者の安倍圭子もヤマハと協力してマリンバの音域の拡大に取り組んでいた（カイト 2011, 67, 84。石原 2018, 22）。

以上のように、高橋は、〈バスマリンバ〉を開発することで、1979 年には、5 oct.の演奏を可能にしていたのである。こうした低音域の拡大が、実際に、マリンバのレパートリーにどのような影響を与えたかを、「表 5　高橋美智子初演作品一覧とマリンバ開発状況」で確認しておく。1979 年以降、Gis24 より低音を持つ、コントラバスマリンバあるいはバ

---

29 コッス産業株式会社は、「文部省教育用楽器審査会審査済みの教育用楽器一覧表」に、木琴を製造している会社として名前が挙がっている（前述（1-1））。

30 「高橋美智子 “Oscillation” for Marimba and Orch. Michiko Takahashi「オシレーション」/松平頼暁 指揮：岩城弘之」 https://www.youtube.com/watch?v=YPAKEaMLMOM （20220928 視聴）

31 ナビンバ Nabimba は、ナディンバ Nadimba ともいう（Blades 1995, 474）。20 世紀前半にアメリカで作られたマリンバの一種で、5 オクターヴの音域を有し、音板は両面とも弓型に削られ、低音域の共鳴管は U 字に曲げられ、その管の口に膜を張ったもの（網代他 1994, 293）。

32 筆者による高橋氏へのインタビュー（2022 年 10 月 10 日）。

スマリンバ、大型マリンバを利用した初演作品の数の推移は、1970 年代 1 作（表 5 の 18）、80 年代 7 作（表 5 の 19、20、24、27、35、37、46）、90 年代 8 作（表 5 の 47、49、50、51、53、55、57、58）となっている。このように、マリンバの低音域が開発されると、それを使用する作品が増え、低音域の楽器が定着した様子が見られる。

3-4　5 oct. と 1/2 の〈大型マリンバ〉

1979 年の松平頼暁作品（表 5 の 18）演奏時に、マッサー社 250 号と〈バスマリンバ〉の連結部分にかなりの隙間があり、演奏しにくかったことから、高橋は、こおろぎ社に、一台で広い音域を演奏できる一体型のマリンバの製作を特注した。その結果、音域が C16-F81 の、5 oct. と 6/12 の〈大型マリンバ〉（写真 4）が完成した[33]。正確な完成年は不明だが、(2-5) でも記したように、1985 年に演奏された金田潮児《「SELECTION II」～マリンバとピアノのために～》で、Cis17-F81 の音域が用いられているので、少なくとも、この時点で、マッサー社の 250 号の音域（A25-C76）を上下に越える C16-F81 の音域をもつ〈大型マリンバ〉が完成されていたと考えられる（表 5 の 27）[34]。

写真 4
コオロギ社に特注した〈大型マリンバ〉

3-5　〈コントラバスマリンバ〉

同時期に、高橋は、〈コントラバスマリンバ〉（写真 5）という C4-B15（Cis5 と Dis7 以外）の超低音マリンバを特注している。1972 年に高橋が創案して、水野三郎に製作を依頼し、8 年間の歳月をかけて、1980 年に完成した（高橋 2015）。最初に〈コントラバスマリンバ〉の一部が使用されたのは、上記の〈バスマリンバ〉を使用した時と同じ、松平頼暁《「オシレーション」マリンバと 3 群のオーケストラのための》の世界初演時、1979 年に使用された。この時は、〈コントラバスマリンバ〉の E8 音のみが使用された（表 5 の 18）[35]。〈コントラバスマリンバ〉の全音域が使用されたのは、水野修孝《マリンバ協奏曲》の世界初演

写真 5〈コントラバスマリンバ〉

[33] 高橋によれば、尾高賞受賞作品、松平頼暁《オシレーション》の 1980 年の再演時にむけて大型マリンバを完成してもらったという。一方で、前述のようにこおろぎ社の齋藤によれば、1982 年以降の完成だという。いずれにせよ、このあたりから低音域がよく用いられるようになったといえる。

[34] 低音域の使用があったとしても、バスマリンバを連結した可能性もあり、一体型の大型マリンバが使用されているとは限らないが、高音域（Cis77-F81）を合わせ持つのは大型マリンバのみなので、ここでは、大型マリンバの使用が確認できる。

なお、Ochi は、1987~2008 の間に C2－F7(C16-F81)の 5.5 マリンバがこおろぎ社によって初めて作られたとするが（Ochi 2016, 121）、1985 年には完成されていた。

[35] 「高橋美智子 “Oscillation” for Marimba and Orch. Michiko Takahashi「オシレーション」/松平頼暁 指揮：岩城弘之」 https://www.youtube.com/watch?v=YPAKEaMLMOM （20220928 視聴）、および筆者による高橋氏へのインタビュー（2022 年 7 月 23 日）

時、1980 年である（表 5 の 19）[36]。

特注によって作られたこの〈コントラバスマリンバ〉は、世界に一組しか存在しない。1 台の楽器が 1 音となる。1 台ずつ試行錯誤を重ねて製作するために、完成までには、大量の木材と 8 年という長い年月が必要であった。現在は、自然保護や資源ナショナリズムなどの見地から、未加工の大きな木材の輸出を禁止する国が多く、今後の製作は難しいという[37]。なお、この〈コントラバスマリンバ〉も、共鳴管の底に薄い膜が張ってあり、ナビンバとしても使用できるようになっている[38]。

表 1　〈コントラバスマリンバ〉を使用した作品
（表 5「高橋美智子初演作品一覧」により横地作表）

初演年	作曲者	作品名
1979 年	松平頼暁	《「オシレーション」マリンバと 3 群のオーケストラのための》
1980 年	水野修孝	《マリンバ協奏曲》
1983 年	吉崎清富	《「赤い虹の詩」～マリンバカルテットのための～》
1984 年	眼龍義治	《「見性」～マリンバ、2 パーカッションによる～》
1986 年	下山一二三	《「響木II」～ソロマリンバと５人の打楽器奏者のための～》
1989 年	鈴木英明	《「ゆく河の流れは」～３マリンバ奏者と３打楽器奏者のための～》
1991 年	下山一二三	《「VISION」～ソロマリンバとフルートによる～》
1992 年	諸井誠	《「矛盾の中の矛盾」1 人のマリンバ奏者を中心に —コントラディクションIV－》
1993 年	諸井誠	《恐龍期　一人のマリンバ奏者による》
1995 年	高橋美智子、川島素晴	《「響音I」～マリンバ、ピアノ、パーカッションのための～》
2005 年	PIRAMI（山田真由美）	《「チェッチェッチェッコリッ」による太陽のリズム曲》

当時、超低音には多くの作曲家が魅了され、興味を持った。その結果、〈コントラバスマリンバ〉を使用した作品は、確認できるだけで、11 作品を挙げることができる（表 1）。1988 年には、冒頭に下山一二三の《響木II》を収録した CD アルバム「驚異のコントラバスマリンバ」が CBS ソニーから発売された（高橋 2017）。

3-6　〈ピッコロマリンバ〉

高橋のマリンバの楽器開発への要望は低音域のものに限らない。当時は、マリンバのオリジナル作品が少なかった為、レパートリーにヴァイオリン作品を取り入れる事が多かった。ヴァイオリンと同じ音域での演奏を可能にする為に、Fis82-C88 の高音域の〈ピッコロマリンバ〉（写真 6）の製作も試みた。高橋が創案し、植竹茂に製作を依頼し、1980 年に完成した（高橋 2015）。

写真 6　〈ピッコロマリンバ〉

[36] 前掲インタビュー。
[37] 筆者による高橋氏へのインタビュー（2022 年 7 月 16 日）。
[38] 筆者による高橋氏へのインタビュー（2022 年 10 月 10 日）。

〈ピッコロマリンバ〉は、〈大型マリンバ〉に連結ができるようになっており、連結すると、C16-C88 の 6 oct.マリンバ（写真 7）となる（高橋 2015）。

そして、上記の高橋が創案した楽器、〈大型マリンバ〉、〈コントラバスマリンバ〉、〈ピッコロマリンバ〉を並べると、C4-C88 の約 7 oct.のマリンバ（写真 8）が実現する。これはピアノにほぼ匹敵する音域である。高橋は、1989 年に発売された CD「スーパー・マリンバ」の中に、この約 7 oct.の音域すべてを使用した《ラ・カンパネラ》を収録しており、これが約 7 oct.を使用した作品の初演となった（高橋 2015）。

写真 7 〈大型マリンバ〉に接続された〈ピッコロマリンバ〉

写真 8 7oct.のマリンバの演奏

高橋が、マリンバの音域の拡大に限界まで挑戦し続け、一流の現代音楽作品を芸術性豊かに演奏して発信し続けたことは、マリンバのクラシック音楽界での地位を築くために大きく貢献し、高橋が 1962 年に大学卒業を前にして立てた 2 つの目標のうちの第 2 の目標「優れた作曲家たちにマリンバの可能性を伝え、音楽性豊かで芸術性の高いマリンバ音楽を創り上げていくこと」（高橋 2013, 23）が実現できたと思われる[39]。

以上、高橋が開発に関わったマリンバの各モデルの音域を、こおろぎ社の鍵盤番号図を利用して、表 2 に示しておく。

表 2 高橋が開発したマリンバの各モデルの音域 (コオロギ社の鍵盤番号により横地作表)

3-7 〈グラスハープ〉と〈クリスタルマリンバ〉

高橋は日本で最初の本格的な〈グラスハープ〉奏者でもあり（写真 9）、また〈クリスタルマリンバ〉の誕生にもかかわった[40]。1980 年当時、日本橋三越では 2 階バルコニーに設置された本格的なオルガン[41]を用いて定期的に演奏会が開かれており、師の平岡もよく出演していた（通崎 2013, 189）。この演奏を聴きに通っていた高橋は、

写真 9〈グラスハープ〉の演奏

[39]. 第 1 の目標は「音楽性豊かに人々の心に感銘を与え、真の音楽を表現することのできる演奏家を育てること」（高橋 2013, 23）。

[40] 筆者による高橋氏へのインタビュー（2023 年 3 月 9 日）。

[41] 1930 年、米国マイテー・ウェルリッツァー社製の電動式パイプオルガンを購入。間口は 8.2m。1930

平岡の伴奏を務めていた三越専属オルガン奏者松沢宏を介して、当時の佐々木硝子株式会社社長佐々木信次氏（1923-2012、以下敬称略）から、自社製のグラスハープの演奏を依頼される。これが、グラスハープと高橋の出会いであった。独学で演奏法を身に付け[42]、1982 年に開催されたインターナショナル・グラスウェアーショウで、お披露目コンサートに出演した（高橋 1997, 1）。演奏終了直後、佐々木から次に欲しいガラスの楽器を尋ねられ、『シンデレラ物語』が大好きだった高橋は、幼少期から夢見ていた〈ガラスのマリンバ〉がほしいと即答した。そして翌 1983 年には、音域が C40-C76 の、3 oct.の佐々木硝子製〈クリスタルマリンバ〉が完成した（高橋 1997, 1。写真 10）。トリオができるようにと 3 台製作してもらったが、実際には、響きが大きすぎてトリオは出来ない事が判明し、ソロ楽器として用いることになった。高橋は、1987 年に CD「高橋美智子　クリスタリーナ・グラスハープ」、1990 年に CD「高橋美智子　クリスタル・ファンタジー」を出している。なお、佐々木硝子株式会社は、「高橋美智子氏のアドバイスを得て、総ガラス製の「グラス・ハープ」「クリスタル・マリンバ」を製作し話題を集めた」と当時の雑誌記事に紹介されている（バンドジャーナル 1984-4, 16）。

写真 10〈クリスタルマリンバ〉

高橋のガラスの楽器による演奏活動は、メディアの注目を集め、1989 年の新橋ガラス博物館での〈クリスタルマリンバ〉演奏は、NHK テレビ、フジテレビ、日本テレビ、テレビ東京、TBS テレビなど各局で放送され、1990 年の現代ガラス博物館での〈クリスタルマリンバ〉演奏は、テレビ朝日「ニュースステーション」で放送された。また、同年、高橋の〈グラスハープ〉の演奏の録音を、浜離宮朝日ホールが幕間の音楽として使用開始する（高橋 2017）。こうした功績により、1998 年に佐々木硝子株式会社と高橋は日本オーディオ協会から『第 3 回・1998 年の音の匠』として表彰された[43]。

〈クリスタルマリンバ〉は、メディアを通して人々の注目を集め、多くの作曲家や音楽愛好家たちにマリンバという楽器の魅力と可能性を示すことになった。一方、高橋の〈グラスハープ〉の演奏に触発されて誕生した作品は、少なくとも以下の 7 曲ある（表 3）。

特に、1992 年の諸井の作品（表 5 の 49）には、〈大型マリンバ〉、〈コントラバスマリンバ〉、〈ピッコロマリンバ〉、〈バスナビンバ〉、〈コントラバスナビンバ〉、〈グラスハープ〉が用いられ、高橋の要望による楽器開発の集大成のような作品になっている。

年に 7 階ギャラリーに設置。1935 年の本館全館完成時に、2 階バルコニーに移す。2009 年 1 月 14 日に、中央区民有形文化財に指定される。
（三越　[発表年不明]　https://www.mistore.jp/store/nihombashi/shops/other/other_shopnews/pipeorgan.html 日本橋三越本店（20230428 閲覧））

42 筆者による高橋氏へのインタビュー（2023 年 3 月 9 日）。

43 日本オーディオ協会 [発表年不明]「音の匠」（『JAS 主催イベント』）https://www.jas-audio.or.jp/events/post1340（20220928 閲覧）

表 3 〈グラスハープ〉作品 （「表 5 高橋美智子初演作品一覧とマリンバ開発状況」により横地作表）

初演年	作曲者	作品名
1983 年	吉崎清富	《「内気な天使の呼び声」～グラスハープとマリンバアンサンブルによる～》
1983 年	西村朗	《「夢見る蝶」～グラスハープと２マリンバ、パーカッションによる～》
1984 年	新村盛史	《「民謡」～グラスハープとマリンバによる～》
1984 年	下山一二三	《「グラスハープファンタジー」～グラスハープと二人の打楽器奏者のための～》
1985 年	松平頼暁	《「クリスタル」～グラスハープと二人の打楽器奏者のための～》
1985 年	宮下秀冽	《「彩」～グラスハープ、三十弦箏、打楽器のための～》
1992 年	諸井誠	《「矛盾の中の矛盾（1 人のマリンバ奏者を中心に）」―コントラディクションIV―》

最後に、高橋が関わった主要な楽器の一覧を挙げる（表 4）。これらは、みな、マリンバの楽器の可能性を拡大してレパートリーを増やし、あるいは一般の人々の話題となってマリンバの普及を促した楽器である。なお、1985 年から 2012 年にかけて学校法人 武蔵野音楽学園に寄贈され、現在は武蔵野音楽大学楽器ミュージアムに保管され、一部は展示に供されている。

表 4 高橋美智子が関わった主要楽器 （高橋 2015、楽器ミュージアム標本台帳に基づき横地作表）

登録番号	完成年	楽器名	音域	製作者	備考
A3955	1979 年	〈バスマリンバ〉	C16-Gis24	水野三郎	創案、特注依頼 高橋美智子 寄贈年 2007 年 寄贈者 高橋美智子
A3836	1980 年	〈コントラバスマリンバ〉	C4-B15 （Cis5 と Dis7 以外）	水野三郎	創案、特注依頼 高橋美智子 寄贈年 2012 年 寄贈者 高橋美智子
A3954	1980 年	〈ピッコロマリンバ〉	Fis82-C88	植竹茂	創案、特注依頼 高橋美智子 寄贈年 2007 年 寄贈者 高橋美智子
A3953	1985 年以前	〈大型マリンバ〉	C16-F81	こおろぎ社	創案、特注依頼 高橋美智子 寄贈年 2007 年 寄贈者 高橋美智子
A2707	1983 年	〈クリスタルマリンバ〉	C40-C76	佐々木硝子	創案 高橋美智子[44] 寄贈年 1985 年 寄贈者 佐々木信次
A3832	1980-81 年	〈グラスハープ〉	F33-A61	佐々木硝子	特注依頼 高橋美智子 寄贈年 2007 年 寄贈者 佐々木信次
A3837	1980-81 年	〈グラスハープ〉	F33-F69	佐々木硝子	特注依頼 高橋美智子 寄贈年 2012 年 寄贈者 佐々木信次

４. まとめ

本論文は、20 世紀後半の日本のマリンバ導入の背景を説明したうえで、その楽器改良に

[44] 前掲インタビュー。

取り組んだ株式会社こおろぎ社と、20 世紀後半から 21 世紀にかけて活躍したマリンバ奏者高橋美智子の活動に注目し、その実態を明らかにし、それが日本のマリンバ界にどのような影響を与えたかを考察したものである。

〈ラクーア音楽伝導団〉が来日し（1950 年）、日本でマリンバを紹介したのは、木琴が戦後の学校の音楽教育に取り入れられて普及していった時期でもあった。木琴で培われた演奏技術をもとに、マリンバの優れた演奏家が誕生し、また、木琴の製造技術を土台として、マリンバの製造も始まる。

後発の楽器であるマリンバの当初のレパートリーはポピュラー音楽や軽いクラシック音楽の編曲ものであった。すでにその時から音域拡大の必要が生じていたが、本格的なクラシック音楽に参入するために、1960 年代初頭から、すぐれたマリンバ奏者が、マリンバのためのオリジナル作品を求めて、最前線の現代音楽作曲家たちに新作を委嘱するようになると、音域拡大の必要性はさらに高まる。こうした流れの中で、演奏家と楽器会社の協働による楽器開発が進められることになった。

従来、安倍圭子とヤマハの協力関係についての活動がよく知られていたが、今回の調査で、日本のマリンバ界における高橋とこおろぎ社の関与も小さくないことが明らかになった。こおろぎ社の場合は、木琴製作から出発し、比較的早くマリンバの製造に取り組んだ。その後、現在の代表者齋藤宰が入社してからは、関東圏への販路拡大をきっかけに、他社の取り組みや演奏家の要望に耳を傾け、音板の材質など、楽器の品質向上を目指すようになり、海外での高い評価も得て、国内トップレベルの演奏家からの特注も入るようになった。そうした演奏家の要求に応じて音域の拡大に取り組み、「ヘルムホルツ型」の共鳴管の開発により、低音部で美しく深い音を実現することに成功した。

一方、マリンバ奏者の高橋は、楽器開発に強い関心を持ち、マリンバの改良はもちろん、ガラス製の楽器の開発にも関わった。高橋の創案によって生み出された〈バスマリンバ〉〈大型マリンバ〉〈コントラバスマリンバ〉〈ピッコロマリンバ〉により、マリンバの音域が拡大したことは、マリンバの楽器の可能性を広げ、すぐれた現代音楽作品を多く生み出す一因になった。なかでもコントラバスマリンバの超低音には多くの作曲家が魅了され、高橋は 11 作品もの新作を初演した。なお、高橋の創案で佐々木硝子が製作した〈クリスタルマリンバ〉も、人々の話題を集め、マリンバの魅力を発信するのに役立った。

高橋とこおろぎ社の例に見たように、マリンバは、演奏家たちが、楽器製造会社と協働して性能向上に取り組み、クラシック音楽への参入を果たした。そして現代音楽作曲家への委嘱によってマリンバのオリジナル作品のレパートリーを拡大したことにより、日本はアメリカと並んで 20 世紀後半の世界のマリンバ界をリードする存在となったのである。

参考文献

網代景介、岡田知之 1994 「マリンバ」『新版打楽器事典』 293 東京：音楽之友社

石原有希子　2018　「安倍圭子のソロ・マリンバ作品――創作スタイル、奏法、および音楽語法的特徴の考察――」　平成 30 年度エリザベト音楽大学大学院博士学位論文
井上さつき 2018 「戦後の器楽教育と鍵盤楽器産業」『愛知県立芸術大学紀要』141-153
Ochi, Megumi. 2016. "*One Hundred Years of the Concert Marimba:American and Japanese Innovation and Convergence,1915 to 2014*". Doctor of Musical Arts Dissertation, Washington University.
カイト、レベッカ 2011 『安倍圭子ーマリンバと歩んだ音楽人生－A VIRTUOSIC LIFE』杉山直子（訳）　東京：ヤマハミュージックメディア
教育音楽協会（編） 1949 「文部省教育用楽器審査会審査済みの教育用楽器一覧表」『教育音楽』2 月: 31-33
栗原義幸 1992 「SUPER　MARIMBA　SUPER　MICHIKO」　『音楽芸術』第 50 巻 12 月: 12
こおろぎ社 1960-99 以降 カタログ 4 点 『1960-65_catalog』『1960-69_catalog』『1969-71_catalog』『1994-99_catalog.pdf』　福井：こおろぎ社
小牧正明 2006 「コマキ楽器創立 75 周年を迎えて」『J.P.C』3　東京：J.P.C 事務局
―― 2010 『コマキ楽器 80 年史』　東京：株式会社コマキ楽器
高橋美智子 1997 「鼓響の妙」『技術と経済』7 月: 1
―― 2013 「振り返りつつ、そしていつも前へ」『マレット　日本木琴協会』No,122: 23-27
―― 2015 「武蔵野音楽大学楽器ミュージアムへのマリンバ寄贈添付資料」手稿資料
―― 2017 「プロフィール」『大学設置審議会提出用業績表』控え。高橋美智子蔵
通崎睦美 2013 『木琴デイズ―平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』　東京：講談社
東京藝術大学 1979、1980 「東京芸術大学学生募集要項（音楽学部・別科）」
Blades, James. 1995.「マリンバ (2)」　浜田滋郎（訳）『ニューグローヴ世界音楽大事典』第 18 巻: 474-475）
武蔵野音楽学園 1966、1973 「入学要項」
武蔵野音楽大学楽器ミュージアム　「標本台帳」
文部省 1947 「学習指導要領　音楽編（試案）　昭和二十二年度」　東京：東京書籍
山田正俊 1977 『J.P.C』東京：コマキ楽器ジャパン・パーカッション・センター事務局
―― 1978a 『J.P.C』2 月　東京：コマキ楽器 J.P.C 事務局
―― 1978b 『J.P.C』6 月　東京：コマキ楽器 J.P.C 事務局

表5　高橋美智子初演作品一覧とマリンバ開発状況

高橋美智子2015,2017、楽器ミュージアム標本台帳、楽譜記載情報などを参考に横地作表。
楽器の開発情報、寄贈情報は当該年に欄を横断して記入。

番号	初演年	作曲者 ※付は 高橋美智子委嘱作品	初演曲、委嘱曲	マリンバ 使用音域	初演状況	概要
1	1961年	入野義朗	ヴィブラフォーンとピアノのための音楽	不明	世界初演	ヴィブラフォーン:高橋美智子 ピアノ:本荘玲子
2	1962年	R.ハウベンストック=ラマティ	リエーゾン	不明	日本初演	(マリンバ2台で演奏) マリンバ:高橋美智子
3	1964年	ダリウス・ミヨー	マリンバ・ヴィブラフォーンとオーケストラのための協奏曲	C28-B75	2楽章 3楽章 日本初演	マリンバ・ヴィブラフォーン独奏:高橋美智子 東京藝術大学音楽学部管弦楽部 指揮:山田和男
4	1967年	福島和夫	2台のピアノと2人の打楽器奏者のための《水輪》	不明	世界初演	ピアノ:小林仁・徳丸聡子 打楽器:有賀誠門・高橋美智子
5	1969年	山内忠 ※	「コティル」マリンバと小オーケストラのための	E32-C76	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 東京藝術大学音楽学部吹奏楽研究部 指揮:山本正人
	1972年				改訂初演	マリンバ独奏:高橋美智子 群馬交響楽団 指揮:尾高忠明
6	1970年	竹内孝治	ピアノとヴィブラフォーンのための5つのインプロヴィザシオン	不明	世界初演	ピアノ:竹内孝治 ヴィブラフォーン:高橋美智子
7	1970年	竹内孝治	フルート、ヴィブラフォーン、 ピアノのためのコンポジション	不明	日本初演	フルート:野口龍 ヴィブラフォーン:高橋美智子 ピアノ:竹内孝治
8	1970年	杉浦正嘉	弦、ピアノ、マリンバ、和太鼓による「マヌシャーマルガ」	不明	日本初演	マリンバ:高橋美智子、佐々木達夫 和太鼓:雨宮靖和 ピアノ:倉形俊介 弦:渡辺恭孝、山崎正秋、多久俊
9	1972年	杉浦正嘉	一人の奏者によるマリンバの為の《朴》	A25-C76	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子
10	1973年	トン・デ・レーウ ※	MIDARE for marimba solo	A25-B75	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子
	1975年				日本初演	マリンバ独奏:高橋美智子
11	1973年	トン・デ・レーウ	「SPATIAL MUSIC」独奏打楽器とオーケストラのための	不明	世界初演	打楽器独奏:高橋美智子 オランダ放送交響楽団ならびにオランダ室内管弦楽団 総指揮:トン・デ・レーウ 指揮:パウル・ ヒューベルツ、ヨス・フェルクーイエン 演奏時間60分
12	1974年	武満徹 ※	《ジティマルヤ》マリンバとオーケストラのための	A25-C76	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 ロッテルダム交響楽団 指揮:エド・デ・ワールト
	1976年				日本初演	マリンバ独奏:高橋美智子 札幌交響楽団 指揮:岩城宏之
13	1975年	ヘンク・バディングス ※	TOCCATA FOR MARIMBA	A25-C76	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子
14	1975年	山内忠 ※	《LEN》Marimba solo, 3 flutes et percussion	不明	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 フルート:小泉浩、他 打楽器:佐藤英彦
15	1975年	宮下秀冽 ※	《妙》マリンバと邦楽器のための	不明	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 三十弦箏:宮下伸 尺八:横山勝也

16	1975年	柴田南雄 ※	《カドリール》～マリンバ、小鼓、マリンバ奏者の心音、テープ変調による～	A25-C76 マッサー250が使用された CD「驚異のコントラバス・マリンバ」での1988年の演奏では、コントラバスマリンバが即興部分に使用されている。	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 小鼓:堅田喜三久
17	1978年	R．ゲールハール ※	LINEAR A for marimba solo	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子
1979年、高橋美智子創案、水野三郎製作による、C16-Gis24の音域をもつ〈バスマリンバ〉が完成						
18	1979年	松平頼暁 ※	《オシレーション》マリンバと3群のオーケストラのための	不明 (E8音のみコントラバスマリンバ使用)	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 東京都交響楽団 指揮:黒岩英臣 第28回尾高賞・受賞
1980年、高橋美智子創案、水野三郎製作による、C4-B15（Cis5とDis7以外）の音域をもつ〈コントラバスマリンバ〉が完成（高橋 2015） 1980年、高橋美智子創案、植竹茂製作による、Fis82-C88の音域をもつ〈ピッコロマリンバ〉が完成（高橋 2015） 1980-81年、高橋美智子特注、佐々木硝子製作による〈グラスハープ〉2台が完成（高橋 2015）						
19	1980年	水野修孝 ※	マリンバ協奏曲	A25-C76 コントラバスマリンバも使用	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 新日本フィルハーモニー交響楽団 指揮:三石精一
	1983年				改訂初演	マリンバ独奏:高橋美智子 日本フィルハーモニー交響楽団 指揮:小松一彦
1983年、高橋美智子創案、佐々木硝子製作による、C40-C76の音域をもつ〈クリスタルマリンバ〉が完成（高橋 2015、高橋 1997, 1）						
20	1983年	吉崎清富 ※	《赤い虹の詩》～マリンバカルテットのための～	C28-C76 C16-C76 C4-C76 コントラバスマリンバ使用	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
21	1983年	吉崎清富 ※	《内気な天使の呼び声》～グラスハープとマリンバアンサンブルによる～	不明	世界初演	グラスハープ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
22	1983年	西村朗 ※	《夢見る蝶》～グラスハープと2マリンバ、パーカッションによる～	A25-G71	世界初演	グラスハープ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
23	1984年	柳谷清道	《乱反射の風景》～マリンバ、パーカッションによる～	A25-C76	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
24	1984年	眼龍義治	《見性》～マリンバ、2パーカッションによる～	E8-D18-C76 コントラバスマリンバ使用	世界初演	マリンバ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
25	1984年	新村盛史	《民謡》～グラスハープとマリンバによる～	A37-Ges58	世界初演	グラスハープ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
26	1984年	下山一二三	《グラスハープファンタジー》～グラスハープと二人の打楽器奏者のための～	不明	世界初演	グラスハープ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
高橋美智子がこおろぎ社に特注したC16-F81の音域をもつ〈大型マリンバ〉が、1985年以前に完成（高橋 2015） 1985年、〈クリスタルマリンバ〉が、学校法人　武蔵野音楽学園に寄付された（楽器ミュージアム標本台帳）						
27	1985年	金田潮児	《SELECTION Ⅱ》～マリンバとピアノのために～	Cis17-F81 F81を使用の為、大型マリンバ使用と推測できる。	世界初演	マリンバ:高橋美智子 ピアノ:久保春代

28	1985年	西村朗 ※	《星曼荼羅》～マリンバとパーカッションによる～	A25-F69	世界初演	マリンバ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
29	1985年	金田潮児 ※	SELECTION Ⅱ ～3人の打楽器奏者を伴うマリンバ奏者のための～	Cis29-B75	世界初演	マリンバ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
30	1985年	松平頼暁 ※	クリスタル～グラスハープと二人の打楽器奏者のための～	F33-A61	世界初演	グラスハープ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
31	1985年	宮下秀冽 ※	《彩》～グラスハープ、三十弦箏、打楽器のための～	不明	世界初演	グラスハープ:高橋美智子 三十弦箏:宮下たづ子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
32	1985年	水野修孝 ※	打楽器三重奏	マリンバなし	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
33	1986年	吉崎清富	《CABALA》～マリンバとヴァイオリンによる～	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子 ヴァイオリン:水野佐知香
34	1986年	下山一二三 ※	波動～尺八とマリンバと打楽器のための～	不明	世界初演	尺八:横山勝也 高橋美智子パーカッシヴアーツ
35	1986年	下山一二三 ※	《響木Ⅱ》～ソロマリンバと５人の打楽器奏者のための～	C4-C16-Ais74 コントラバス マリンバ使用	世界初演	ソロマリンバ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
36	1986年	下山一二三 ※	風紋Ⅳ ～打楽器とテープのための～	不明	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
37	1986年	下山一二三 ※	THE DA～for Michiko Takahashi and three percussionists～	ナビンバ 使用有 C16-G35	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
38	1986年	くりもとようこ	トライアングル イン ブルー～マリンバとヴァイオリンによる～	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子 ヴァイオリン:水野佐知香
39	1987年	土井克行	MONOLOG FOR MARIMBA	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子
40	1987年	土井克行	マリンバとオーケストラのための協奏曲	F21-C76	世界初演	マリンバ独奏:高橋美智子 東京フィルハーモニー交響楽団 指揮:小松一彦
41	1988年	遠藤雅夫 ※	MARINE SNOW～ヴィブラフォーンとパーカッションによる～	マリンバなし	世界初演	ヴィブラフォーン:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
42	1988年	白秉東 ※	《CONTRA》～for a marimbaphonist and two percussionists～	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
43	1988年	鈴木英明 ※	相即―4人の打楽器奏者のための―	不明	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
44	1989年	山田泉	ノオトⅠ-b～マリンバと2人の打楽器奏者による～	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子 打楽器:荒瀬順子、他
45	1989年	松平頼暁 ※	FLUCTUATION～ソロマリンバとマリンバアンサンブルによる～または、～ソロマリンバとテープによる～	不明	世界初演	ソロマリンバ :高橋美智子 高橋美智子パーカッシヴアーツ
46	1989年	鈴木英明 高橋美智子に捧ぐと記載	《ゆく河の流れは》～３マリンバ奏者と３打楽器奏者のための～	Ⅰ C4-C76 Ⅱ A25-C76 Ⅲ F21-C76 コントラバス マリンバ使用	初演記録なし	

47	1991年 1993年	下山一二三 ※	《VISION》～ソロマリンバとフルートによる～	D6-C16-C76 コントラバスマリンバ使用	世界初演 日本初演	ソロマリンバ :高橋美智子 フルート:ブラッドリー・A・ガーナ
48	1992年	諸井誠	協奏交響曲　第3番「神話の崩壊」	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子 三十弦筝:宮下伸 オルガン:松居直美 東京交響楽団 指揮:秋山和慶 演奏時間50 分
49	1992年	諸井誠 ※	《矛盾の中の矛盾(1人のマリンバ奏者を中心に)》―コントラディクションⅣ― 第一部　進化 第二部　モビリストとフィクシスト 第三部　ヘテロトピアを超えて	コンサート・マリンバ グランドマリンバ コントラバスマリンバ ソプラノマリンバ（＝ピッコロマリンバ） ナビンバ バスナビンバ コントラバスナビンバ グラスハープ	世界初演	マリンバ・打楽器:高橋美智子 三十弦筝:宮下伸 尺八:横山勝也 演奏時間50分
50	1993年	諸井誠 ※	恐竜期　一人のマリンバ奏者による	C4-C16-C88 コントラバスマリンバ 大型マリンバ ピッコロマリンバ使用 途中、コントラバスナビンバ使用	世界初演	マリンバ・打楽器:高橋美智子
51	1993年	一柳慧 ※	Aquascapes～for solo marimba, flute, piano & 2 percussions	C16-C76	世界初演	マリンバ:高橋美智子 フルート:ブラッドリー・A・ガーナー ピアノ:クリストファー・オールドファ―ザー 打楽器:ドミニク・ドナート、エリック・チャールストン
52	1993年	宮下伸	《花唱》～箏、三十弦筝、マリンバによる～	不明	世界初演	マリンバ:高橋美智子 箏・三十弦筝:宮下伸
53	1995年	高橋美智子 川島素晴	《響音Ⅰ》～マリンバ、ピアノ、パーカッションのための～	コントラバスマリンバ マリンバ グラスハープ	世界初演	マリンバ・パーカッション:高橋美智子 ピアノ・パーカッション:川島素晴
54	1996年	高橋美智子 川島素晴	《迷夢》～マリンバ、ピアノ、パーカッションのための～	不明	世界初演	マリンバ・パーカッション: 高橋美智子 ピアノ・パーカッション: 川島素晴
55	1996年	三木稔	「Z協奏曲」マリンバ、打楽器とオーケストラのための	F21-C76	日本初演	マリンバ:高橋美智子 打楽器:有賀誠門 東京芸術大学音楽学部・管弦楽部 指揮:佐藤功太郎
56	1999年	遠藤功	スケルツォ～ 4人の打楽器奏者による～	マリンバなし	世界初演	高橋美智子パーカッシヴアーツ
57	2000年	石井眞木 ※	「協奏曲M-2000」～マリンバとオーケストラのための～	Cis17-C76	世界初演	マリンバ:高橋美智子 東京交響楽団 指揮:小松一彦
58	2005年	PIRAMI（山田真由美） ※	「チェッチェッチェッコリッ」による太陽のリズム曲	マリンバワン コントラバスマリンバ使用	世界初演	マリンバ・コントラバスマリンバ:高橋美智子 ピアノ:中井恒仁 打楽器:中村梓
2007年〈バスマリンバ〉、〈ピッコロマリンバ〉、〈大型マリンバ〉、〈グラスハープ（A3832）〉が、学校法人　武蔵野音楽学園に寄付された（楽器ミュージアム標本台帳）						
2012年〈コントラバスマリンバ〉、〈グラスハープ（A3837）〉が学校法人　武蔵野音楽学園に寄付された（楽器ミュージアム標本台帳）						